



No. '23-1

(No.112)

Jan. 2023

ISGG NEWSLETTER

伊東市善意通訳の会

C O N T E N T S

1. “アサギマダラ”がやってきた	会員 菊池 善次郎	2
2. 2023年初めに思うこと	会長 稲葉 尚子	5
3. 2023年は癸卯（きぼう）の年	会員 小西 恒男	7
4. 英語らしさについて On the Town 6	会員 水谷 順	12
5. 第25回国際交流フェスタに参加して	会員 小松 透	14
【事務局便り】		16
【編集後記】		16



1月の英語サロン風景

“アサギマダラ” がやってきた！



会員 菊池善次郎

新年あけましておめでとうございます。

2023 年元旦、また新しい年を迎えました。コロナ禍の大嵐が始まってから 3 年目となります。しかし、まだまだ嵐の終わりが見えません。今後どうなるのか明確な見通しも立っていない状況です。

それでも今年は 3 年ぶりに行動制限が出されない年末年始となり、待ってましたとばかり久しぶりに帰省する

人達や観光旅行に出かける人達で各地もこれまでにない人出だった模様です。当地伊東もしかり、国道 135 号線は上り下り久しぶりに渋滞。城ヶ崎海岸門脇灯台へ通ずるわが家の前の道もこれまでにない沢山の観光客が行き来していました。

元旦の朝、毎年のことですが、私は日の出前に起床、10 分程歩いて門脇崎に到着。まだ薄暗い中、門脇吊り橋は初日の出を拝むため鈴なりの人です。橋の上に約 50 人。橋の両側の岬（門脇崎と“かどかけ”）の先端に集まった人を合わせると総勢 200 人を超える人だったかと思います。

水平線には伊豆大島がうっすらと見え、天気は快晴ですが、わずかに雲の帯がありました。日出時間が近づくとつれだんだんと辺りが明るさを増してきて 7 時 7 分、雲の上部から眩まばゆいばかりの今年初めての太陽が照り始めました。伊豆大島と雲の帯のため暦上の日出時間より約 10 分遅い初日の出です。

元旦の初日の出を見ると何故かその年はハッピー、いいことがある様な気になるのはなぜでしょう。外国人にはあまり聞かない文化・風習の様です。

ところで皆さん去年はどんな年だったですか？いい年でし



2023 年 1 月 1 日 0707AM 初日の出
(伊東市城ヶ崎海岸門脇崎 門脇吊り橋)



わが家のフジバカマの蜜を吸うアサギマダラ

たか？あまりよくない年でしたか？ 各人各様、住む環境も感心事も立場も興味も違うし、測る“ものさし”も違うので人それぞれだとは思いますが、私は？いろいろありましたが、まあ悪い年ではなかったと思っています。コロナ禍で旅行も出来ず、又、昔の会社の恒例イベントや友人達との集まりは中止や延期で出来なかったけれど、コロナに感染することもなく、病気にもならず怪我もせず、自由に時間を趣味や好きなことに費やすことが出来、そして昨年 11 月、0.83 世紀もの年月を生き長らえたということは、平々凡々な毎日ではありましたが、まずまず幸せな年だったと考えていいと思います。さらに本当のことを言えば昨年はまい日まい日新聞やテレビ、ネットニュースで伝えられたロシアのウクライナ侵攻と長引く戦火、現実そこに居る人達のことを考えれば如何に自分（達）は幸せな環境で過ごしているのかと思った年でした。

幸せを感じた出来事の中に昨年の 10 月、長距離を旅することで有名な不思議な蝶“アサギマダラ”がわが家の庭にやって来てステンドグラスにも似たその美しく神秘的な姿を見せてくれたことです。

一昨年の秋、家内がフジバカマ（秋の七草の一つ）の苗を 2 本買って来て鉢に植えました。数センチぐらいの小さな苗で「花が咲くまで何年かかるのかなあ？」と思った程ですが、春になるとどんどん生長し 9 月には 2 本共 40cm 程の大きさになり茎の先端に花の蕾が見え出しました。そして 10 月初め見事な花が咲きました。花をよく見ると 4~5 ミリの小さな花が集まって大きな花の見えるのです。一つの鉢は白い花、もう一つは薄紫の花です。



10 月 20 日、2 階の窓からフジバカマを見ていると花に何かがぶら下がっています。「もしかして？」とすぐ庭に降りて行ってフジバカマの傍^{そば}までそっと近づくと、なんとアサギマダラが花の蜜を吸っているではないで

花にぶら下がる様に蜜を吸い、時々フワフワとステンドグラスの様な美しい羽を広げます。

すか！体長 5~6 センチ。全面ステンドグラスを張り付けた様な美しい羽。時々ゆっくり羽を開いたり閉じたりします。時々花から離れてひらひらと優雅に舞い、又、花に戻ります。そして夕方近くにはどこかへ行ってしまいました。

翌日 10 時ごろ又アサギマダラがやってきました。今度は 2 匹。3 日目は 4 匹。4 日目は 5 匹。そして 5 日目 2 匹飛来して、それを最後にもう来なくなりました。

フジバカマとその蜜が大好きなアサギマダラについては伊東自然歴史案内人の資格を取る研修の時、先生（植物の大家？）から話を聞きました。伊東の自然や景観のメイン案内スポット「大室山」の山頂には自生のフジバカマがところどころに生えていて「秋の七草フジバカマの花の咲くのは秋。アサギマダラも見られたら幸いです、是非、お客さんに説明してやって下さい」と教えられました。しかし私は大室山を何十回となくお客さん（外国人&日本人）をガイドしましたが残念ながらフジバカマとアサギマダラをお客さんに説明するチャンスはありませんでした。

伊豆では河津の私設植物園や下田のホテルのフジバカマ園にアサギマダラがやって来て旅行客を魅了させている話は聞いています。又、伊東ニューヨークランプミュージアムのフラワーガーデンや伊豆高原のフジバカマ園など広大なフジバカマ園でアサギマダラを呼び込もうしている話もあります。しかし、たった2本のわが家のフジバカマにまさかアサギマダラがやってくるとは思いませんでした。

しかも5日間にわたり累計14匹も。

アサギマダラは図鑑によると日本、東アジア、ヒマラヤ山脈に分布。フジバカマが大好き。和歌山県から香港まで2,500Kmを移動した記録あり。産卵のため春に台湾、沖縄、南西諸島から中部、関東、東北地方に移動し秋に又南の生活地へ移動する、と云うことです。しかし何年生きているのか、同じ蝶が往復移動するのか、或いは世代交代するのか、旅の途中強風もあろう雨も嵐もあろう長旅をどの様に成功させるのか、途中で休む所もない広い海の上を渡り鳥と違ってあのやわらかな羽でどう飛ぶのか、などなど、まだまだ分かっていないことのある不思議な蝶だと云うことです。調べてみたらアメリカにもアサギマダラにそっくりの MONARCH（和名：オオカバマダラ）という不思議な蝶がいることを知りました。カナダからメキシコまで5000キロを移動すると云うことです。

美しく、優雅で、神秘的で、不思議な蝶アサギマダラがわが家に立ち寄って、しかもたった2本のフジバカマを見つけて、体を休め、南への長旅の燃料（蜜）を補給したのではないかと思う時、何かほんのりした幸せな気分となりました。「来年（今年のこと）、何かいいことあるかな?」、と丁度元旦の初日のまばゆい光を見たときの様に思いました。今年はウクライナに平和が訪れます様に、コロナが終息します様に念じつつ。

2023年初めに思うこと



会長 稲葉 尚子

2023年が始まって1か月が経ちました。

今年の抱負などを書きたかったのですが、耳に入ってくるニュースは明るいものが少なく、新年らしいものが書けそうにありません。

戦争、地球環境問題からの異常気象、コロナ、物価高、以前にはなかったような物騒な事件 etc.

コロナの行動規制が緩くなり、外国人観光客が戻ってきて活発な活動を取り戻したSGGもあるようですが、伊東はなかなか思うようにいかないのが現状です。

それは、伊東の地形と交通事情も関係していると思います。ISGGがガイドコースに推薦し、外国人観光客が行きたがるスポットは伊東駅から車で30分程かかる城ヶ崎海岸や大室山。以前は会員個人の車で案内し喜ばれていたのですが、安全面などを考え公共交通機関を使うことに決めました。するとやはり効率的に案内することができず、スマホをフル活用している観光客は自然の中を歩くにはガイドの必要性を感じないようで、コロナも重なり要請はほとんどなくなってしまいました。

私事ですが、数年前に、「初期ではありませんよ。」とガンの告知を受けました。その時、先のわからない不安の中でどうやって生きていこうか考え、行動を3つに分類しました。

1. どうしても最低やらなければならないこと。
2. どうしてもやりたいこと。
3. 義理、お付き合い、習慣でやっていること。

そして残された人生を1と2だけ、特に2は先延ばししないで思い切ってやろうと決めました。

子育て時代が終わっていた私は、3をできるだけ省くことで、随分楽になり、自分の時間がつくれるようになりました。それと同時に自分が今まで「やるべきだ」と思っていたことが本当はそれほど大事な

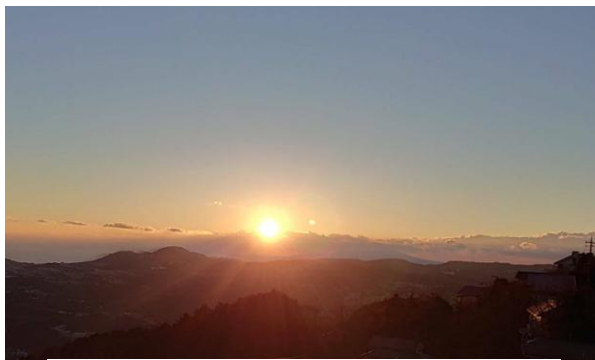
事でなく、やらなくても回っていくということもわかってきました。

ISGG が今のままの方法では上手くいかないと思ったとき、そのやり方が応用できないかなと思いましたが、ISGG はボランティア団体で会員の義務はありません。ISGG を使って、会員が自分のやりたいことをやり、それが結果的にみんなの為にになっていることもあるし、少なくとも自分の喜びになっているということではないでしょうか。ガイドをしたい人、イベントに参加して外国人と友達になりたい人、英語を楽しみたい人、スキルとして英語をみがきたい人、皆自分の為に会を利用し、そしてその会を運営するために少しずつ力を貸してくれることが1の最低やらなければならないことにあたると思います。

その意味では、新しく始めた英語講演会は多くの方が喜んでくれていると思いますし、英語サロンも会員の有志だけでなく、ALT の方も喜んでくれていると思います。すべての会に出席することを義務とせず、反対に出席したくてもできない人にはその楽しみを他の方法で分けてあげることができ、「会ありき」でなくて、会員がそれぞれ会を利用し、うまくバランスがとれたら、ISGG は存続していけるかと思えます。

むかしむかし、私が成人式を迎えるころ、「混沌の海へ」という本を手にし、内容は忘れてしまったのですが、何もわからない自分が大人として世界に出て、「混沌とした海」の中でキラキラした宝石を見つけしていく期待や抱負をふくらませた覚えがあります。

2023年の混沌とした世界の中でも若者はその中に希望の星をみつけて行ってほしいですし、ISGG が少しでもそのお役にたてたらうれしいです。



初日の出 (会員 相良恭子撮影)

2023年は癸卯（きぼう）の年



会員 小西 恒男

2023年（令和5年）が静かに新年を迎えた。今年は干支（「えと」又は10干12支）でいうと、癸（みずのと）卯（うさぎ）の年である。この癸卯を音読みすると「きぼう」となる。

10干は中国古代の世界観を表す。古代人の生活に必要な5つの要素（5行説）と天地の万物の形成には光と影（昼と夜）の2面を持つ陰陽説が組み合って10干となる。5行とは木・火・土・金・水を表し、それらには相関関係（順序）がある。最初は「木」があり、次に「火」が来る、木が燃え尽きて「土」となり、土の中に「金」が現れ、その表面に「水」が付着する。水が再び木を成長させ森羅万象の移り変わりを表す。

この陰陽5行説が時間の単位となる。即ち月の単位は10日で計算され、10干が採用されるようになる。

この思想が日本にも伝わり、日本では陰陽が後に兄・弟（え・と）として使われるようになる。

10干を漢字で表すと次のようになる。

木（甲・乙） 火（丙・丁） 土（戊・己） 金（庚・辛） 水（壬・癸）

今年は10番目の「みずのと」（癸）にあたる。

今回は干支について以下思いつくまま述べてみたい。

1) 日本の元号の起源について

今年は令和5年である。2019年5月、天皇の譲位により日本の元号は平成から令和に代わった。令和の由来は万葉集の5巻、大伴旅人主催の「観梅の宴」の和歌32首からピックアップされたということは皆の記憶に新しいことと思います。それでは元号の起源は何でしょうか。

起源は西暦645年に遡ります。この年が「大化元年」で、歴史上有名な「大化の改新」の年です。今年（癸卯）を60年サイクルで振り返ってみると、西暦643年になる。まだ元号が制定さ

れていない年である。大化元年を干支で表すと2年後の干支であるから、乙（きのと）・巳（み）となる。乙巳は「いっし」と呼ばれ、「大化の改新」を「乙巳（いっし）の変」とも呼ばれている。令和は248番目の元号である。

2) ウサギの話

ウサギの話と言えば「ウサギと亀」や「ピーターラビット」などが思い浮かばれるが、これらはいずれも外国の話である。日本では「因幡の白兔」が最もよく知られている。

「大きな袋を肩にかけ、大国様がきかかると、ここに因幡の白兔、皮をむかれて赤裸」

文部省唱歌に指定されているこの物語の白兔は古事記に登場する。

隠岐の国に住んでいる白兔が本土の因幡の国に渡りたいと一計を策す。近海に棲んでいる「わにざめ」を並ばせ、その背中を使って隠岐から因幡へ渡るというものである。計画は成功し、あと少しというところで、白兔の不用意な発言からわにざめに計略を知られてしまい、白兔は身ぐるみ剥がれてしまう。兔が途方に暮れていたところ、大国（大国主命）が通りかかり、傷の治し方を伝授し、兔は元の元気な白兔に戻り、メダシメダシとなる話である。

この白兔は大変賢いが、最後の詰めが甘く失敗する兔として描かれており、以後兔はズル賢い性格であると言われるようになる。

余談であるが一体「わにざめ」をどれくらい動員したか考えてみよう。隠岐島—白兔海岸（鳥取市）の距離は100km（10万m）である。わにざめを1m毎に配置させると10万匹、2m毎であれば5万匹となる。兔の知恵も大したものであると感心させられる。

兔についても一つ、中国のことわざに「狡兔三窟」（こうとさんくつ）というのがある。

狡兔はすばしこくてズル賢い兔、三窟は三つの穴をいう。

「すばしこくてズル賢い兔はいざという時のために三つの隠れ穴を持っている」という意味から、人は身の安全のために多くの避難場所や様々な策を持っている、またはズル賢い人は用心深

く抜かりなく困難を脱出する手段を持っている。中国でも兎の性格はすばしこくてズル賢いと考
えられている。

3) 兎に関する言葉、ことわざ

兎に関する言葉をいくつか紹介する

① 二兎を追うものは一兎も得ず

欲を出して同時に二つのことをするとどちらも失敗するという教訓

② 兎の耳 (耳は長く聴力に優れる また左右の耳は別々に動く)

隠し事や人の知らない事件、噂を巧みに聞き出すこと

*彼は兎の耳だから油断したら痛い目に合う

③ 株(くいぜ)を守りて兎を待つ 中国の故事

まじめな農夫が偶然株に当たって死んだ兎を得た。以後農夫は仕事をやめ、二匹目の兎を待ち
続けるという中国の故事 進歩しないまたは融通が利かないことの例え

日本の童謡「まちぼうけ」の原点

④ 金烏玉兎(きんうぎょくと)

太陽と月を表す中国の格言。太陽には鳥(烏で表す)、月には兎が住むという言い伝え

月に兎が住むという話は中国、日本のほかにインド、ミャンマー、アメリカにもあるそうであ
る。月で兎は何をしているのか? 日本では餅つきをしていると言われ、中国では不老不死の
薬を作っていると言われている。

4) 癸卯(きぼう)年の出来事

癸卯年の過去を振り返ってみると、数は多くはないが、歴史上重要な事件が起こっている。

① 1603(慶長8)年 徳川家康が江戸幕府を開いた年、つまり江戸時代の始まりである。

又この年は出雲阿国が京都北野神社で初めて「歌舞伎踊り」をした。歌舞伎の始まりである。

② 1543（天文12）年 ポルトガル人が種子島に上陸、鉄砲を伝える。

癸卯の年は新しい時代の幕開けとなっている。

③ 1783（天明3）年 東北から関東、東海にかけて大飢饉が発生している（天明の大飢饉）。

伊豆地区も大きな被害が出ていると記録に記されている。

以上より今年を占うと、新しく何かが起こるか、あるいは、何らかの災害発生の恐れありとなるであろうか。

5) 干支に由来する言葉

干支に由来し、現在も残っている言葉を拾ってみたので、いくつか紹介する。

①「皇紀」について

日本の年代の表記に「元号」（前述）のほかに「皇紀」がある。

神武天皇の即位を元年として紀年号を表す年法である。（西暦紀元前 660 年＝皇紀元年）

この呼称は昭和 20 年の戦争終結まで、長い間使用されていた。この紀元前 660 年を定めた根拠は以下のとおりである。

昔から辛酉の年（かのと・とり）には大変革が起こるものとされ、特に 21 回目の辛酉の年が特別に大変革が起こるとされていた。推古天皇の年 601 年が辛酉の年にあたり、遡って 21 回前の辛酉の年（1260 年前）を神武天皇の即位と設定した。これを設定したのは明治政府である。全く根拠のない説であるので戦後「皇紀」は使用されなくなった。

②「甲子」（きのえ・ねずみ）

10 干 12 支の最初の組み合わせである。1924（大正 13）年が「甲子」にあたる。この年に作られた野球場が「甲子園球場」である

③「丙午」（ひのえ・うま）

「ひのえうま」に生まれた女は気性が激しく、夫を不幸にする。と昔から言われている。

中国では「丙午」の年は天災が多いと言われており、この伝承が日本に伝わってきた。

1682年「八百屋お七」の事件が起こる。彼女は「ひのえうま」生まれだと思われ、以後この迷信がはびこることになる。

前回の「丙午」は1966（昭和41）年である。この年の出生率は4.9%減少した。妊娠、出産を避けた夫婦がこの迷信を信じたためである。そして翌年は5.7%増加した。次回の「丙午」は2026年である。どのような結果になるか楽しみである。

④「庚申」（かのえ・さる）

昔から「庚申」の日になると人間の体に棲む3匹の虫（さんし）が天に上り、天帝に悪行を報告に行くという言い伝えがある。人間はそれを恐れ、その夜は徹夜で警戒に当たる風習が生まれた。「庚申講」や「庚申塔」は現在でも使われている言葉である。

⑤「子午」

12支を時計の文字に当てはめてみると「子（ね）」が午前零時、「午（うま）」が午後6時を指す。したがって「卯」は午前6時、方角では東を表す。地球の南北軸を表す線「子午線」はここに由来する。

⑥その他歴史上よく知られる西暦672年の「壬申の乱」や1911年の「辛亥革命」は干支にまつわる出来事である。

以上 癸卯（きぼう）の年をヒントに10干12支について紹介してきた。

2023年が「希望の年」になるように！

英語らしさ、について On the Town 6



会員 水谷順

アメリカ語の発音

米国で暮らしていた時、二人の同僚がいた。苗字は Sullivan と Solomons。ある日上司が「あの二人の苗字は同じだから紛らわしい」というので、僕はキツネにつままれた気分になってしまった。全然違う苗字じゃないか。しかしアメリカ風に発音すると確かに極めてよく似ているのだ。二つの苗字はアタマが Su と So、これ、アメリカの発音では、どっちも「サ」である。つぎに Li と Lo。これも米語では「ラ」。次は Va と Mo。これは「ヴァ」と「マ」だが、アクセントのない音節なので、ほとんど聞き取れない。かすかに、「a」という母音が聞こえてくるだけ。さいごは母音のない「n」、そして両方もアクセントは冒頭の「サ」にあるから、Sullivan は「サラバン」、Solomons は「サラモン（最後の S はほとんど発音されない）」。聞いてみると確かに紛らわしい。上司の耳にはそう響いていたのだ。我々非英語民族は、単語を綴りで覚える癖があるが、ネイティブは綴りより音なのだ。

同じようにゴリラ、Gorilla とゲリラ、Guerrilla の発音も全く同じ。並んでいる子音と母音の順が同じだから。どっちなのかは文脈で判断するしかない。「ジャングルでゴリラの群れの横をゲリラ軍団がそっとすり抜けていった」なんて文章は結構紛らわしいだろうね。

「L」の発音は曲者。Like, Love のように語頭にあるとはっきり発音するが、語中や語尾にあるとほとんど発音されない。芝桜は綴りは Phlox だが「L」は発音されないので「ファックス」と聞こえる。これはキツネの Fox とまったく同じ。園芸店でファックスといえば芝桜だし、動物園でファックスといえば、キツネのこと。話はそれるが、She is really a fox. といえば「彼女は本当に色っぽい」という意味で、こういう時は誰も芝桜、と間違えたりしないですな。

ある日上司から「おい、メイトーという日本の会社を知ってるか」と聞かれた。メイトーといえば旧名古屋製糖、略して名糖だから、日本人なら誰でも知っている食品メーカーだ、と答えたが、どうも話がかみ合わない。上司は、これは日本人がアメリカでやっている企業で我々の同業他社だ、と言う。在籍していたのは化学製品や化粧品で、食品ではないし、名糖が化粧品に進出したという話も聞いたことがない。それで上司につづりを書いてもらって、やっと納得した。Matol なのだ。もうお分かりだろうが、この語尾の L は発音されない、サイレントだから「メイトー」と聞こえたのだ。

こう書いてみると、L という音は確かに曲者である。アクセントのない L は発音されない、と言っても、本当に発音していない、というより、聞き取れないくらい弱い発音、が正しいのかもしれない。Water Soluble（水溶性）の Soluble のアクセントは語頭の So にある。アメリカ人の発音では、ウォーターサイヤバーと聞こえる。ところが、soluble だけゆっくり発音させると、ちゃんと「サリューバー」と聞き取れる。彼らも無意識に L の発音を早口だとすっ飛ばしてしまうらしい。

W の発音も結構デリケート。ある日、職場で、Lewis、ルイス、という男の苗字を発音しようとしたが、全く伝わらない。仕方がないから、綴りを書いたら「ああ、ルイスね」と言われたが、その「ルイス」の音が僕の発音とは全く違う。どこが違っているかという、真ん中の W を僕は発音していなかったのだ。W の音は唇の両脇を閉めて、そのまま唇を突き出す。日本語の「わ」とは全く違った音だ。しかし日本人の僕は綴りを見てしまう、そして W の発音を日本語の「わ」や「を」みたいに言う。しかし Wi というのは日本語にはない音だから、どう発音していいかわからない。だから英語民族には伝わらない悪循環になる。Wall, Wood などアメリカ人はきちんと W を発音している。日本人はこれらの語頭を日本語の「ウォ」や「ウ」のように発音する。それでも日本風の発音でこれらの単語は伝わってしまうので、あまり深刻に考えないが、米国で暮らしていると、ちゃんと W を発音できないと困ることが時々ある。かなり英語のうまい日本人でも、W がきちんと発音できる人は少ないのではないか。

日本人にはRとLの発音が難しいという。これは我々がカタカナ英語に慣れ親しんでしまったからではないだろうかと考える時がある。発音の基本は日本人でもすぐに理解できるし、ネイティブが発音しているのを聞けば、LなのかRなのかははっきりわかる。しかし、カタカナになった単語、例えば「ラグジャリー」のラとりはどっちなのか、と言われると、一瞬戸惑ってしまう。アメリカに行って最初の1年ぐらいは、このカタカナ英単語の呪縛を払拭することに苦労した。なお、現地で小学校の教員から聞いた話だが、実はアメリカの言葉を覚えたての乳幼児はLとRをはっきり発音し分けられない子がある程度いるとのこと。日本の乳幼児でも、カキクケコが言えないで、タチツテトになってしまう子がいるように、それぞれの言語でそれぞれの癖があるんだなあ、と実感した。

第 25 回 国際交流フェスタに参加して



会員 小松 透

好天に恵まれた 2022 年 11 月 6 日(日)、国際交流フェスタが開催されました。コロナの影響で中止が続
き、3年ぶりの開催です。感染者数を見ると開催日は第7波と第8波の中間にあり比較的運が良かった
と言えます。

私と家内はずっと ISGG のブースに座って来訪者の対応をしました。他の ISGG のメンバーもフェスタの
各所で活躍していました。

大活躍した一人は Katie です。まず振り袖を着てステージで琴の演奏があり大好評でした。そしてアイ
ルランドについてのプレゼンがあり、そしてお得意の歌声を聞かせてくれました。Ethan からはイギリ
スの生活や文化についてプレゼンがありました。ただし歌声は無しです。

アメリカのブースでは加藤守康さんはじめ皆さんが例年通りの楽しいコーナーを開いてくれました。米
国に関するクイズは私も初めてではないですが、なかなか高得点を取れません。

主原さんはオーストラリアのブースを担当するかたわら、各所で働いていました。稲葉さんはアゼルバ

イジャンブース、相良さんは折り紙ブースを担当しました。特別なのは加藤達雄さんのおいしいエスプレッソコーナーです。

ISGGのブースはステージから近かったので、私たちは座ったまま全てのプログラムを特等席で見ることができました。どれも素晴らしかったですが、ウクライナの方の哀愁のある歌は心に響き感動しました。

ISGGのブースはどちらかと言うと地味で、実演や体験コーナーなどは有りませんでした。パソコン上の紹介画面や案内誌が用意されていました。「善意通訳の会」とはどんな会なのだろうと興味を持って訪れてくれた人が何人もいらっしゃいました。特にどの言語の通訳をサポートしているのだろう、普段どんな活動をしているのか、国際交流協会とはどういう関係なのだろうという質問がありました。入会に興味を示してくれた方もいました。

ブースにはノートパソコンが1台あるだけでしたが、より魅力的にするために大きめのモニター画面に映すとか、パソコンを複数台用意して来訪者が操作できるようにするとかの方法が考えられます。内容は英語に関するクイズなど良いかもしれません。

来年の国際交流フェスタが今から楽しみです。



国際交流フェスタにて ISGG ブース

【事務局便り】

2023年度最初の Newsletter での事務局便りです。 残念ながら世界ではコロナ禍、ウクライナと不安定な情勢が続いています。 又、今年はインドの人口が中国を抜くとかドイツの GDP が日本を抜くとか言われていますね。

さて、我らの ISGG は堅調に又、若干の変化を加えながら活動を続けております。 イチゴサロン、英語サロン及び土曜会は毎月開催しています。 特に英語サロンは会員がより参加しやすいように火曜日の夜から土曜日の午後に変更しました。 12月は恒例の忘年会を伊東周辺の ALT を招待して開催しました。 又、この春には第3回英語講演会も予定しております。



忘年会にて第1回英語講演会講師 Paul 氏に感謝状と特別会員証を授与

【編集後記】

菊池さん、今年も早速のご寄稿有難うございます。戦争や詐欺はては強盗事件など、殺伐とした話題の中、アサギマダラ飛来のお話には心が和みました。美しい写真も添えてくださいました。

「何か良いことがあるかな？」とお書きですが、アサギマダラが、お家の庭に飛来してきたこと自体がヨイコトであります。

稲葉会長の「2023年始めに思うこと」

究極の場面でお考えになった3つの分類。特に1と2が大切と言うことで、私もその1番目を肝に銘じて、何とかこの編集後記を書いている次第であります。

小西さん、今年の卯年は癸卯の年、癸卯は希望と同じ音、希望の年なる事を願ってやみません。年号、

暦、干支、兔にまつわる様々な話を詳しくご紹介頂きました。

私の場合は If you run after two hares, you will catch neither.

「二兎を追う者は一兎をも得ず」を地で行っております。hare は野兎で発音はhairと同じ。私の頭のhairは、ほとんど退化しております。

さて水谷さん、「英語らしさ、について」。

大変参考になりました。私的見解ではありますが、アメリカ人と話していると思いがけない音に出くわし、後から spelling を聞いて「ウ～ン、そう来たか」と思い知らされることが多々あります。微に入り細に入りご説明に感謝、感謝！

小松さん、ご夫妻で国際交流協会のフェスタ、お世話さまでした。3年振りの開催でどうなる事か心配されましたが、客入りも良く賑わいました。

ISGGの会員の皆さんも各ブースで大活躍されておりました。小松さんご担当の我らがISGGのブースにも多くの方が訪れ、活動に興味を持って頂き、なによりでした。

事務局からのお知らせにもありますように、この春には「英語講演会」も予定されております。今年もよろしくお願い申し上げます。

尚、編集部では皆さんのご投稿を心よりお待ちしております。

TK記 (tea & cake)

伊東市善意通訳の会 (ISGG)

会長 稲葉 尚子

(事務局) 413-0232

伊東市八幡野 1324-40 主原 一雄

e-mail : larryn@estate.ocn.ne.jp

<http://itosgg.info/>

(編集委員) 稲葉尚子、曾我廣子、加藤達雄